

	<p>エッセイ</p> <h2>サハリンの塙の中の話</h2> <p>sce-net 神田 稔久</p>	<p>E-37</p> <p>発行日 2012.8.21</p>
---	--	--------------------------------------

塙の中と言うと、監獄をイメージする方も多いかと思いますが、それとは少し違う塙の中の話です。

その塙は、サハリンのプリゴロドノエにあります。州都、ユジノサハリンスクから車で1時間、主要港のコルサコフから30分の辺鄙な場所にあります。sce-netの会員の方なら、樺太の政庁所在地の豊原から1時間、稚泊連絡船の着く大泊から30分の、日露戦争当時日本軍が最初に上陸した女麗村と説明した方が分かりやすいかと思います。

また、ここまで読めばエネルギー関係に強い方は、サハリンLNGの液化基地のある場所だということが分かるかと思います。

2007年の7月、私はここでサハリンLNGのスタートアップのコンサルタントとして1か月滞在する経験をしました。

「神田さんはLNG受入基地の専門家で、何故、液化基地のコンサルと呼ばれたのか？」と不思議に思われる方もあるかと思いますが、これにはLNG液化基地のスタートアップ方法の変革が関係しています。

これまで液化基地では液化設備を生かしてから、生産されたLNGを使って設備の冷却を行っていましたが、サハリンでは天然ガスパイプラインの建設の遅れもあって、LNGを受け入れて関連設備の冷却を先行させる方法を初めて採用しました。これまでの方法とは、全く逆の方法となります。これにより工期の大幅短縮が可能になります。

そのような経緯で、LNG受入基地のスタートアップ経験が買われてサハリンに行くことになりました。

基地周辺は殆ど人家が無い所で、基地建設の人間を収容できる設備はありません。当然、仮設のキャンプ建設と言うことになり、基地に隣接する場所に塙で囲われたキャンプが出現しました。塙の中ですから周辺警備は24時間体制、また入門の検問は厳しいものでした。ここでは衣食住すべてが支給され、働く人は、キャンプと基地を往復するだけの生活を強いられます。私が滞在した時は、日本、英国、米国、韓国・インド・トルコ・フィリピンなど世界各国から12,000人近くの人々が来て働いていました。敢えて言えばロシア人が一番少なかったかも知れません。

ここでは、三食をキャンプ内の食堂で食べます。量はたっぷりなのですが、毎日同じような献立ですぐに飽きがきてしまいました。殆ど全ての食糧を州外から調達せざるを得ないサハリンの食糧事情を考えれば、これは止むを得ません。そのような中での楽しみは夕

食後のビールです。アルコール中毒やアルコールに起因するトラブルに悩むロシアですから、飲酒には厳しく、食堂に入る時はアルコール検査があります。従って飲酒は食後に娯楽室でということになりますが、これもジョッキ 2 杯までと決められています。むろんウオッカはありません。健康には丁度良いと、自らを慰めながらビールを楽しんでいました。これも、暫くすると、街へ出た時に買って来たウオッカを秘かに持ち込んで部屋で飲むことを憶えてしまい、有名無実化してしまいました。

月曜から土曜まで勤務した後の唯一の楽しみは、日曜日にユジノサハリンスクやコルサコフまで運行される買い物バスです。これに乗って、ユジノサハリンスクやコルサコフの街を逍遥したり、美味しい昼食を楽しんだり、日本に帰るお土産を物色（ユジノサハリンスクの空港には売店はありません）したりしていました。それと、キャンプには持ち込み禁止のウオッカもしっかり買っていました。

ユジノサハリンスクやコルサコフは、自由に歩くことが出来るのですが、鉄道施設や港湾施設の撮影をしようとするとうちから係員が現れて注意されます。ロシアの外国人に対する監視の厳しさを垣間見る思いがしました。

また、時には、街まで行かずにキャンプの近隣を歩くこともありました。季節がアウトドアライフを楽しむ最高の時で、海岸では市民がピクニックや海水浴を楽しんだりしていました。周辺の岡には随所に小さな湧水があり、その周りを、短い夏を咲き急ぐかのように咲く花々が取り巻き、気持ちの良い景色が展開していました。また、旧日本軍が残した上陸記念碑も残っていて、日露戦争を身近に感じる思いもしました。

日本で心配していた塙の中の生活も予想外に快適に終わり、LNGの荷卸しを終えて基地を去る LNG タンカーを見送った後、塙の中の生活にピリオドを打って帰国しました。

サハリン液化基地全景



日本軍上陸記念碑





旧樺太政庁



大泊港